

これからの読書指導に求められるもの

山梨大学教育学部教育実践研究指導センター助教授
(前お茶の水女子大学附属小学校国語科教諭)

澤本和子

お茶の水女子大学附属小学校国語科教諭 成田信子

この調査は、小学校高学年生の読書行動を、とくに学校図書館との関わり観点から明らかにすることを目的として行われている。報告書の第I部を一読後、小学校で日常接する高学年児童の読書行動と読書に対する意識が、具体的にわかりやすい形で数値化され、分析されていることを感じた。また、ここに示されたデータは、現代の小学生の持つ問題点を、読書行動という一つの切り口から切りとって見せてくれたように思う。

この小論では、示されたデータを元に、小学校教育の立場から、「学校図書館との関わり」を中心に、これからの読書指導の在り方について考えてみたい。

論の進め方は次の通りである。

1. 現代の小学生をとりまく環境と読書生活
2. 21世紀の学校図書館の役割
3. 生涯学び続ける読書人を育てる

1. 現代の小学生をとりまく環境と読書生活

(1) 家庭での学習の在り方をめぐって

まず、第I部1-1-(3)「読書時間と勉強時間・テレビ視聴時間などの比較」を見てみよう。このうち、「本を読む」時

間は平均42.4分で、「テレビをみる」「外で遊ぶ」などの6項目中で5位である。

ここでは、「家で勉強する」時間が、平均79.0分を占めていることに注目したい。高学年の子どもは、学校でも毎日5~6単位時間の学習をしている。帰宅後の学習時間がこのように長いことを考えると、現代の小学校の5・6年生の家庭での学習環境は、大いに整えられていると見ることができる。

ただし、本調査の「家で勉強する」に塾等での学習が含まれているのか否か、明らかではないが、現場での子どもの実態から推察すると、むしろ学校以外の学習にやや拍車がかかりすぎてはいはないかと危惧されるところがある。このことが、子どもの読書生活に影響を及ぼしていないだろうか。

国語の成績別のデータでみると、読書時間と家で勉強する時間は正の相関関係にある。すなわち、家でよく勉強する者は、本もよく読むということである。しかし、5年生と6年生を比較してみると、勉強時間は、73.8分から83.9分と約10分も多くなっているのに、逆に読書時間はわずかだが減少している。勉強時間が読書時間を奪うことになっているのではないだろうか。

このことは、「学校図書館をめぐって」

に示された利用率にも表れている。5・6年生では、3・4年生よりも図書館の利用率が低下する結果が出ている。その理由は、上位から「とくに読みたいと思わない」「マンガのほうがおもしろい」「学校や塾の勉強で忙しい」である。学校図書館の利用率低下だけで、読書生活そのものが縮小したと短絡することはできないが、この傾向から、学習時間以外は、あまり頭を使わずにのんびりゆったり過ごしたい、という現代の小学校高学年児の気持ちを読みとることもできそうである。

以上2つのことから、家庭での学習の負担を学校生活も含めて、バランスよく配慮する必要がある。

(2) 読書傾向

「最近1ヵ月の読書」の1位は、物語・童話である。物語、童話の魅力を探ってみると、筋の面白さ、登場人物への共感や興味(自分との比較)、物語世界の構築、主題の想定などがあげられる。読書の際、その子どもの読書力によって、いかなる魅力が引き出せるかが左右されることは言うまでもない。それゆえ、ある意味では、読書の力相応の楽しみ方ができるといふことにもなる。

しかし、一方では、物語を読むことは、最終的に自分と向き合い、自分の心を読むことにもつながる。真剣に読み、真面目に考えてこそ、読書の醍醐味が享受できるというものであろう。

最近1ヵ月の読書を国語の成績別に見ると、成績下位の子どもが、物語・童話を読んでいる比率は、上位の子ども

れを大きく下回っている。このことから、私たち教師は、子どもがほんとうの意味で読書の喜びを感じとれるような力を育てる必要を痛感する。

(1)で述べた家庭学習の在り方を含め、現代の教育環境が、子どもから、自分自身と向き合う大切な学習経験を積み重ねる機会と時間を奪っていないか、もう一度考えてみる必要がある。

2. 21世紀の学校図書館の役割

(1) 豊かな読書生活を支えるために

現代は軽薄短小の時代と言われて久しいが、1で述べたとおり、子どもたちの読書生活も例外ではない。「勉強、勉強」と子どもが追われることで、真の意味での学習意欲を減退させ、楽なものへと流される傾向を産み出してはいないかという懸念を抱くわけである。学校教育の現場でも、現状のまま手をこまねいてはいけないと思う。

「学校の図書館で本を読んだり借りたりする割合」では、45%の子どもが、学校の図書館に「ほとんど行かない」と答えている。地域の図書館には、さらに高率の69%もの子どもが「ほとんど行かない」という現状である。まず、学校図書館をもう少し子どもにとって魅力ある場にし、学習の場として活用できるようにしていきたい。

そのために、ひとつの参考となるのが、「学校図書館への要望」であろう。多くの子どもが、「気軽に行ける」「自由に本を読める」ことを求めている。整然と本

がらび、貸し出しの場であるというよう
な従来の図書館のイメージでは、こう
した子どものニーズにできていけないと
いうことになろう。

また、もう一つの参考として、「図書館
で読む本」に触れておきたい。これによ
ると、図鑑・百科事典、社会科学習、理
科学習に役立つ本がいずれも低い順位に
ある。社会科学習、理科学習というよう
なジャンル分けてではなく、地理的・歴史
的読みもの（日本各地の暮らし、産業構
造、自然との闘い、世界の国々等）や科
学的読みもの（動物記や昆虫記、生態観
察、科学実験の手引き等）という切り口
で問えば、また別の結果が出たのではな
いかとも考えられる。いずれにしても、
小学校教育では、情報提供の場として図
書館を活用する機会は、まだまだ少ない
と言わざるを得ない。

これらの問題点を踏まえて、次に、21
世紀の学校図書館の望ましい在り方につ
いて考えてみたい。

②学び方・調べ方を学ぶ場として

近年、各地で、様々な角度からの授業
研究が行われるようになった。特に、子
どもが自ら学ぶ姿を求めて、カリキュラ
ムを改革したり、学習形態、学習方法の
多様化を工夫したりする試みが見られる
ようになった。

こうした時代の流れの中で、学校図書
館は格好の学習の場となりつつある。新
しい学習指導要領では、特別活動の内容
A「学級活動」(2)で、「学校図書館の利用
や情報の適切な活用」という記述が見ら
れる。「情報の適切な活用」のためには、

どんな学習活動を組み立てていけばよい
のだろうか。

例えば、学級新聞を発行するときに、
子どもたちが「日本の秋祭り」について
調べることにしたとする。図書館に索引
カードが整備されていれば、まず「祭り」
の項で関連する資料がないかどうか探す
学習がある。次に、分類を見ながら、書
棚から必要な本を見つける仕事がある。
そして、どんな記事にしたいかを念頭に
置いて、取材し、メモがとれるようにす
る学習が必要になる。さらに、百科事典
や図鑑の利用も含めて、情報検索のため
の学習技能の習得が必要になる。

お茶の水女子大学附属小学校では、十
数年にわたって、「創造活動」という総合
学習の時間を設けて研究を続けている。
子どもが、直接体験を通して、学習方法
をも学ぶことを重視し、自ら学ぶ力を育
てていこうとするものである。低学年か
らの積み重ねによって、高学年では、子
どもがテーマを選んで、教師の助言を得
ながら自力で研究を進め、1冊の本にま
とめられるようになる。

これは一例にすぎないが、各教科、道
徳及び特別活動、ゆとりの時間等で、学
校図書館を大いに活用して、学び方その
ものの指導も工夫していきたいと考える。

③情報センターとして

以上のように、学校図書館が、学び方・
調べ方を学ぶ場として機能するためには、
情報検索をシステム化しておく必要
がある。先進校ではすでに取り入れられ
ているが、コンピューター導入により、

貸し出しの処理やジャンル別の本の呼び
出し等を行うこともできる。専門の司書
教諭を置いて、カリキュラムを作ってい
るところもある。また、学校図書館と地
域の図書館が協力して、同様のシステム
で情報検索ができるようにすると、さら
に教育の効果を高めることもできるであ
らう。

こうした条件の整備が、子どもに図書
館に行けば「知りたいことがわかる」「勉
強ができる」という意識を持たせること
につながる。

3. 生涯学び続ける読書人を育てる

豊かな読書生活のために、学校の担う役
割は大きい。ここでは、さらに視点を広げ
て、小学校という狭い枠の中だけでなく、
以後、読書人としてどのように育ってほ
しいかをも考えてみたい。

「小学生の読書体験」で、「読書の後、ど
のような気持ちになるか」を12項目の中
から選ばせている。そこには、興味深い結
果が出ている。

「時間があつという間にすぎる」「もっと
いろいろな本を読みたい」「知らないもの
や世界のことを知った」などの項目は、50%
を越える子どもが体験している。すなわち、
読書のよい面を多数の子どもが味わって
いるということである。「学校で習ったこと
に関係していろいろ調べられ参考になった」
の数値が比較的低い。2で述べたことが
実現されれば、さらに増えることが予想
される。

また、読書体験を肯定的にとらえる9つ
の項目で、数値が成績の上位層>中位層>

下位層となっていることに、改めて学習状
況との深いつながりを感じた。

望むべくは、成績との関連だけでなく、
友人関係やその数などとの関連も知りたい
と思う。上位層と自分で思っている児童の
中にも、読書を堪能してはいるが、それが
友達づきあいがうまくいかないための逃避
であったり、友達に心を開けない裏返して
あったりする場合が考えられるからであ
る。

ほんとうに豊かな読書体験とは、それが
その人自身の人生の糧となり、人間関係の
改善につながるものであろう。

このように考えると、生涯学び続ける読
書人を育てるために、小学校では、まず学
び方の基礎と読書活動を関連して指導する
ことが大切になろう。そして、さらに、互
いの読後感を交換する場を設けるなど、互
いの向上を意識できるような読書指導に今
後も努めていきたいと考える。